

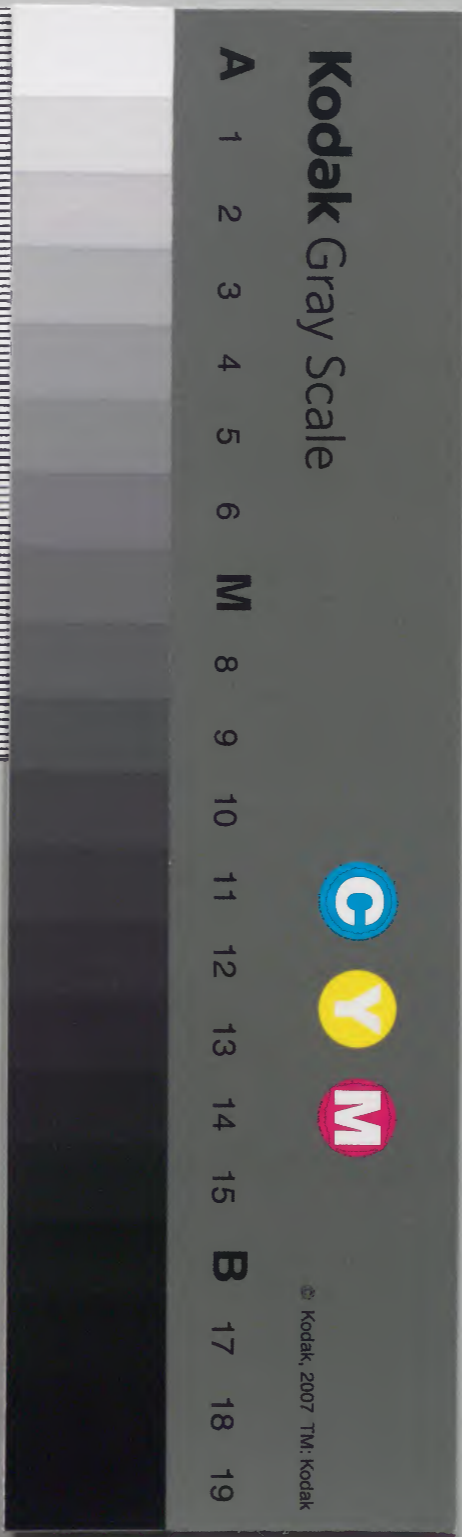
歌仙解難鈔

下

		和書門	
	二五		
	一六		
	九		
	五		
三冊	架	函	號
三	三	六	五
冊	架	函	號
類			

庫文閣内		和書	
	二五		
	一六		
	九		
	五		
三冊	架	函	號
三	三	六	五
冊	架	函	號
類			

内閣文庫	
番號	和 25695
冊數	3 (3)
函號	201 422



和學講談所

日吉山

和學講談所

三十六人歌仙家集解難抄庫

和學講談所

一 志賀山越の滝沢よせらる可頼基

あつたの屏風よ志賀山越の滝沢よせらる可頼基

あつた結ぶ人あつた白玉と山乃尾よりまぬささくおらける
滝もささくしつと題よ。志賀の。雪をどる誰を
思ひよりゆききた。あつた山越の。げん。げん。げん。
ささく。ささく。ささく。ささく。ささく。ささく。

一 初書

初書のをよせ初くゆきやらよ

初書此をよせ初くゆきやらよ

い。方。山。越。の。心。ま。く。初。書。か。め。づ。く。く。好

和山集

はらう。幾度も元用ひくべし。たのむべし。
とつふ句はうらふ。暗の字と牛らうこゆんく。
上は義理をわひしうらふ。

一 下南野よかししんふとよゆん

望之

いなる中よしうくそし拍本は紫原の廣くおきう友ら来まう
ふもこ納涼おとよ。幾度も用ひくべし。たのむべし。

一 立かられ勢し

村よまうねせし拍本の昔はよ夏はあつまりよちり
しうる。家は妙もあふよ。意もくも書たり。時
といふと入くこまは来。秋乃初よちりといふ。立

かたねきし立寄かくるなり。るやせりせん
事あり。か乃文字と法るべし。下句のこころ
當天は時。拍本の系は陰もくすじしんを

一 琴うひよれ松

日向をよ琴うひよ乃松あり。岸は浪よに
白浪のりる系と結よすけく風よさうる琴うひよれ松
琴よあふ。松よ松の字琴うひよ字なり。あふん時。
ゆらゆら。うらさくもやまうらるるあり。やう

出し給ふべし

一 かとららびくし

陸奥はみく。鴨の首よ。虎の尾より

やうおまきや。たうとまのひーかた

巨か三川落そし滝は白糸ち山のまもありつるよそありをる
いりか三川いりいりいり河なり。世よ似どおとろし

三川おまきば人るが

わう三川滝乃白糸をる人のうたありぬありしやをかり
これらたあ。みか信濃乃まもあり。おまよ月名あり。
そよまよ三川おまよむ。とがとる三川よかけり。
は信濃もたもが三河よハ滝をよめり。滝とらみ
題よ元出く讀べし。但家集よかんをよて
あま巴。正字とあつだ。信濃の玉ちん風上記よ
あり。ん出くまをた事なり

い記書よつらゆは湯やあると。名所乃歌
枕おまよハはくは湯とよみく。枕席也
字よかけり。又いもが三川のあははきもおま
乃玉ちんうらふし。信濃乃玉りも。
巨か三河ありとまるせる事なり。信濃
の玉ちんハあまきど。これよと名けり川な
しらういり

一 三河乃地

三河乃地。みちたきまゆりよやくほどふ。
あまこころどまらる。おまよ三川の地よまらる
や。家らいばくぞとん。こばら地乃地とん。

うたやりのまよめしる

むすぢりり

ふ世に位はこれ他一からう福もむすぢりりむすぢりり
 子年とていねくむすぢりりけし鶴の池といひていひりき
 けりやあつち重之なるべし。池の境とある懸
 う。又い他鶴をいあつちむすぢりりむすぢりり
 撰集へ入るるすぢりりも。けりりさめくも。歌仙集へ
 あるとていね本記よむすぢりりべかへりのうさか
 ひなにいさうとか祢てよめりなるべし
 一 けりりむすぢりり
 うさかの滝とこれよるさめくむすぢりりあし。きりり

あつちりり

ふらよあつちりりあつちりりあつちりりあつちりり
 こまの奥州報滝なり。又新続古今よ
 まよめく報の滝とらえむすぢりりあつちりりあつちりり
 けりり九列よあつちりり報乃滝あり。又有るむすぢりり
 同名あつちりり。うさかめくむすぢりり歌のうさか
 一 けりりあつちりり風

あつちりり秋

あつちりりあつちりりあつちりりあつちりりあつちりり
 ありあつちりりあつちりりあつちりりあつちりりあつちりり
 他のまよめくあつちりりあつちりりあつちりりあつちりり

東風と書くは、いづれも、東の風と云ふ

一 いづれ

聲きけは、あつたは、虫の聲と云ふは、

世に目ぐるは、日物と云ふ人のあはれも、いづれも、別

とれと云ふも、おろしと云ふも、親類をいふも、いづれも、

下向乃ち、あつたは、目ぐるは、蝶と云ふと、日と云ふ

一 あつたは、あつたは、あつたは、

一 やうぢのは

名元川や、あつたは、あつたは、あつたは、あつたは、

あつたは、あつたは、あつたは、あつたは、あつたは、

あつたは、あつたは、あつたは、あつたは、あつたは、

なん。今、いづれ。奥州、あつたは、あつたは、あつたは、

あつたは、あつたは、

一 位野、あつたは、あつたは、あつたは、

位野、あつたは、あつたは、あつたは、あつたは、あつたは、

あつたは、あつたは、あつたは、あつたは、あつたは、

あつたは、あつたは、あつたは、あつたは、あつたは、

あつたは、あつたは、あつたは、あつたは、あつたは、

あつたは、あつたは、あつたは、あつたは、あつたは、

あつたは、あつたは、あつたは、あつたは、あつたは、

あつたは、あつたは、あつたは、あつたは、あつたは、

一 柳を、あつたは、あつたは、あつたは、

はらけがらひはらひのむらじのむらじ。はらけむらじと
ふははらひ。あまのむらじのむらじをむらじ
あまのむらじとむらじ。むらじ川鴨の名あまのむらじ
一 いやむと

うらけしむら細代木のかむらじとむらじ。あまのむらじとむらじ
氷菓もあまのむらじとむらじ。あまのむらじとむらじ
氷魚とむらじとむらじ

一 魚びゆ

魚びゆはむらじとむらじ。あまのむらじとむらじ。あまのむらじとむらじ
へびらしむらじのむらじとむらじ。あまのむらじとむらじ
のふらむらじとむらじ。あまのむらじとむらじ。あまのむらじとむらじ

思ひなむらじとむらじ。あまのむらじとむらじ。あまのむらじとむらじ
ふらむらじとむらじ。あまのむらじとむらじ。あまのむらじとむらじ
又蛇ありやむらじとむらじ。あまのむらじとむらじ。あまのむらじとむらじ
ふらむらじとむらじ。あまのむらじとむらじ。あまのむらじとむらじ
乃移りむらじとむらじ。あまのむらじとむらじ。あまのむらじとむらじ
ふらむらじとむらじ。あまのむらじとむらじ。あまのむらじとむらじ
らしむらじとむらじ。あまのむらじとむらじ。あまのむらじとむらじ
かむらじとむらじ。あまのむらじとむらじ。あまのむらじとむらじ
むらじとむらじ。あまのむらじとむらじ。あまのむらじとむらじ
べむらじとむらじ。あまのむらじとむらじ。あまのむらじとむらじ
つけやむらじとむらじ。あまのむらじとむらじ。あまのむらじとむらじ

一 御ひまらるる

御ひまらるる君の著る書もさういふ時におぼれりそふくもふすえ
御ひまらるる御とやがら内唱替り。さうがれ兼歌
といひ。惣じては替りたかかやうに替りて多く
まらるるまらるるまらるるまらるるまらるるまらるる
れどもいふまらるる

一 御ひまらるる

おろくさるる露乃玉とさ人物思ふ君涙ととらる
るるまらるるまらるるまらるる。又のれまらるる。只まらるる
惣たらるるまらるるまらるる。昔冠抄句名れまらるるまらるる
まらるるまらるる

一 御ひまらるる

八月を坂乃園ふまらるるのへまらるる
なまらるるまらるるまらるるまらるるまらるるまらるる
けまらるるといふ。最深てまらるるまらるるまらるるまらるる
まらるるの清まらるるまらるるまらるるまらるるまらるるまらるる
まらるる。貴之乃まらるるまらるる。但雷のまらるるまらるる
まらるる。昔まらるるまらるるまらるるまらるるまらるるまらるる
まらるる。十六日よ成ての時乃事まらるる。十七日甲斐の徳坂
のまらるる。まらるるまらるるのまらるるまらるるまらるるまらるる。

立申の一日。廿二日は信申せる月申す約。廿八日
よ八上野の一日。次芽とてことば志おれくる月のは
も廿二日なり。貴之の歌も十命のじしとてうして
る月とよゆる。志うねを名知はあつざるべし。
十八束乃事なるべし。廿二日も月のおそき比あり。
かやうに事よくおとぐのちるべし。あそほく
ころかあふるうらば

一 あつとま本

十一月佛名の家

あつとまのまゝなるあつとまはれうよそくちかかるとはよく
世に事とてことば。因裏よかどは。佛名の家

ふとら。十一月佛名をよそく。年中に羅摩を
清威とるなり。あつとまの海とるなる極本を
とら。あつとまの家とあつとまのよそくを
佛名をの起り。永和元年内裡よ。一万を子
乃御名を唱へ礼あり。永和乃のよそくを
うらうら。漸天下よあま祿しと。云はよせ
らまら。あつとまのあつとまの我身よ精る年月を
送らしよと行なう。いそとて仕る仏名のあ
よあつとまの。あつとまの家よ仏名を
れ。道守所際なく。あつとまのあつとまの
作をると書く。あつとまのあつとまの

其れ成然もどふり〜と程の事よとぞ。おろく
と事よせんもれり。さうふちいぬことおれど。推量りて
ふれり。あつくか後の人くよまぐのころるべし
くつりのうはゆき

君さうはあまはらふはつらこのゆはよおれ然もれり
ゆふの風まじりの事めく。書つと書けり。されど
くろくもあづささる。白髪れしむるべし。がら
の事よれり

一 せれがみねく

思ひよをせし縁くはらふの田よ浦までさぬやいをれを
せれがみねくもねてよて。何れもあるんけり。跡後

〜と葉けり。九月よりも〜からま〜とや

一 あさいや

七月七日ねんを庭あけりて。中ねごと交わつ男来
つとく難のそやよまらり

柳様よけさか〜けるあさいととりのみあると人ちあ〜とや

あさいとも麻乃緒あり。それをねり字よか録する
あり。七日の早朝より。何よてもかた物を庭よれ出り。
も向室く。夜よ入。訪か管弦のあそびととらと。も
巧真といふあり。いととらと。夜よかまらせよあり

一 都る

天元三年壬辰登よなりり。高下。系大納言

一 家の人を餓する日ありし

越の海はじき六つちやを初もみわふはるこそありし人なり
はやくあつしと源順受領して徳登の玉司あり
て下向よりあり。あつしをた。世本ありて徳登はるこ
越の海よこやこもよむべし

一 をしつかかひ

ありしはた大長。半賀あせらた又衣志ゆりしよ
ま毎わつれはてそわらふ小塩のひよ年ゆふまは
かひもふらひ。渡乃字なり。又お奇をしつかかひ
兼たふあしとるべし

一 梅のこが里

梅のねよるお形りつよとて人のねら
るるやといゆりしよ

ねと書ふと云かこくとも梅のねかやけぬかうり
梅の奇よまはんよ。ふ及ん流。水乃野とさざりて
と。大勢乃人の作よかたり讀んと心と。びねと死
目よべし。ねまをた形りねまがらよそむくべし
一 志はるゝ海

四月よやを時が有るありまうて来と。道り
郭をた唱しといひゆりし。はねでよ
まをねはるよまき油がし思ひいぬが。志川や。ゆりか
志川ねまといふねと。志川なるふあねといふ事あり。

よけらるる人も。菊の名をよけらるるよみゆき
み。けらるる人もよけらるるよみゆき

一 ながらの山乃さきこる

人のをたゆらぬ

百世たゆらぬ山乃さきこるの今昔よりそ昔はむら
裳衣とよき女のはじめく裳袴とよきあり。さ
げき石もつづくれあもよよとくるしからま

一 お海風

え真

先鷹とこく

初人を送る。わらわらあま風は雲井とよふ。吹くもるも
あま風。天は風はたあ。休まの法をたふさるわあり。

一 よしは河乃終

しし川の川よきこくさなやま

ししの川乃終の終をよけらるるよみゆき
くれ。板乃名なり。いづくれ題あくる。むとくさ
とよこそくるしからま

一 浅香はぬまのあま

しらたぬまのあまのぬまのほやうよよまよりさ
まろ人そらしまわら

さよはく浅くはたのたけぬ煙も若たありなり
浅くはた煙の名なり。煙のたけぬをたけぬ。
あろけつらるる

一 かちの巻

稲中いなかに家のまへは河ありをねは河巻なりがね

河巻も今百世もをねともふ河のそこゆくすもそくろん

川よあるかりなり。敵巻を海がめしつらごとく

一 草子の巻

白露のいよとむきと草たけうとをなすふいろやらうん

いろやらうんが。来るうんねき。古今集物語あり

あまことかうとむとら。草のうら。白ふ草とくん

堀川院次郎百首。秋部の中め。草香とよと出

せり。草たけうとも又くくの香うはつとかうて

も懐り。又百首の巻めて草のうらとよめり

新古今集よ。秋の中ふはねる草のうらとよ

ねといくらね名ありあうん

一 かくれ巻

はそおとく

去れ回らうらか。けりうらうらと男をねたけひきまらうら

細男。ねやせらる男。ね若男。まごはせだ。男は丈夫

とく勢いよく。も是長く。腰やうく。をけくいさか系を

おと次。うねるまをまをまとしてを大丈夫とけり。それ

うらなかりや。そとひ。まをうらうらも。平氏乃いや

しおとれをほそおとくうらふ巻

一 けり巻

新編 源氏物語

源氏物語

人乃子状うらむ七夜り

云井も今も病しん草造れる勢あつたつる鶴たむさる

ひれどばうらむ訓ゆるむをどらうもいむす始飲

よれしうどわら

「みらけ也

ののちく人ぬらぬやうはそく

道彦もおとらうれか夜のもをも病さんよみそ

きよむ道は造り病る乃其のあやむしそよはれ

あまの文字と入どしそらやそきばあまじ

五甲のべ

一 ねらり

停勢は海初らうと云まらづあまを物思ふとハるも満うし

なごりハ能はし書りねらうとハるを彼乃えれり

一 さいよみり

清みれ山けくまはきつきてわあつたふらみうらぬ

洛陽清あつた田村丸の建立までうもあまえるまも

なまじ古あよんてはして連あよせぬ事よまきり

いそまらうととえれは清みれ山とよはりう向後

ふよびよ事なりう源氏物語よ志之川とれ記者

とよるあつたこれと統は京は屋あなりあ備

あまし書り思ふよはあまかこめく初ら清み

あまらひ出くよと結るあべいけあまはんあ

後出 源氏物語

二二

ろ。拾玉集。清あるの儼乃自糸とあるは
なり。かましくねなるも不なり。あると連文
とんつもごうし。史は清あるとあるも
一 姉とあるしつて

ふじいさね君のむしひい。さやあひの
はあのみよてにねが。姉とてしつて世の
かふつと。新よらひい

一 ひとねがね くらぶのちの
まをれらる人よひやる

あしるもく定活の川は流はくもひとねがの
かどひの死體よして。人を書けり。人ね
つととらへら。かひ

世あふらけの骨をえんとてん細代の
あしるねがねとひとのうとねとひとね
字なり。よらるもあてらりかきまる事なり

一 身とはぬく 仲文

名紙の又乃日。家外ありとて
近きあねのねなるさねの中お
わらねと野分れ外も隣よりあま
ゆら

やなりうらちまきまきとよある
風よ

歌
の
用
字
考

とぐハ有れ字なり。つぎや早トして。佐
有略してしふはを。身ととぐとよなり。類
ふなり

一 なるしれかろ 忠見

六月河のかやりよかろしは

水とほふまては水よいとをうの神示なりし

あとの字と神の字よ用いし。六月世はた
へと名紙乃とくとよあり。をほまいつまらかろし

夏神樂とよ

一 菊乃よさせよ

九月九日よまはは綿つつけらるゆし

万世と人のよち菊はよまよをひけく。香をけりぬ
を陽よりあおよあて。菊よよとさせよ。
まよへかこのよとよなり

着綿と九月九日よ限る事よ。菊と貴
乃ちよあま。堀河院百首九月九日とよ
よて兼昌いよよとよ。菊をえよとよ。
綿よさせよ。あよ。九月よ菊は
あよね年と。綿よまよ。乃よはありをけり
て。校よはくろ事なり。よは菊は用し
よ事を通長とよ。菊はよとよ。
とよよはくろ今約のさせよ。

歌
の
用
字
考

歌
角
前
後

七
三

かひ者へへ

一年乃あるべし

何る事乃屏風よ。正月せむする所あり

去震その日とむうはけ年此ある一とよきやかまん

節する事と年此ある一とよきやかまんの字

よあつども。食の字なり。ほきどい。かま乃字。かまなり

一 ままこら

中勢

山里よはくおあをさく

山里よはくおあをさく。山里よはくおあをさく。山里よはくおあをさく

まきこら。まきこら。まきこら。まきこら。まきこら

一 て庵も

つねちのあをさく

君てへう命とせける。昔は山の上をたるとや。おのひやうん

て。むし。おのひやうん。おのひやうん。おのひやうん

おのひやうん。おのひやうん。おのひやうん。おのひやうん

おのひやうん。おのひやうん。おのひやうん。おのひやうん

一 海川らふ

池よはくおあをさく

君あふあふ。心とせける。池の夜波まのり。るるまのり

池よはくおあをさく。池よはくおあをさく。池よはくおあをさく

或人の云。おあをさく。夜浪松をさうとあり。おあをさく

あり。おあをさく。夜にまのり。おあをさく。おあをさく

次山解集

七三

仙家集解雜抄

松よなますくもあがり。あよよせくハ福さふあがり。
此福をせやくもあがり。月よぶふ終

一 柳一見乃柳

梅花ちりかふるよとさるふあり伏たの里よ宿やかうま
世本平うらう柳一見も梅もなまあがり。梅乃題と
ゆきやうい出まぶ

一 夏山よ鳴麻

堀川ち中たまお柳さふま
夏山乃鳴けりよとけく鳴麻といつてやまは人あがり
夏山よ鳴麻ゆきけきハ出いゆりぬ

二十六人方仙家集解雜抄下終

書中先

二十六人方家集を考ふよん抄入也。よよ。永清
大概よんしを後とと。大勸を色ととんる人移集。
又んるもとと。福むある哥とと。次。元まじと記
とやらある。今用捨い。高。音。蒙。か。を。先。と
けい。ゆ。り。の。な。ま。可。秘。と

天正十七曆林鐘念二日

法印 立判

歌仙角天沙路

七十四

元文四年己未六月吉良日

京都書房吉田四郎右衛門

同 野田彌兵衛

同 上坂勘兵衛

江戸書林野田太兵衛

大坂書肆瀬物屋傳兵衛

泉鏡

今

